

◇千二小三十三回生◇

藤村修内閣官房長官の横顔

編集部



昨年の9月2日、野田佳彦首相は内閣の要の官房長官に藤村氏の起用を決め、氏が就任されました。

氏はご存じのように千二小の33回生（昭和37年卒）で、千里山会総会には毎回祝電をいただいております。また、会誌への寄稿をお願いしたところ、快く引き受けていただき、3号・7号に文を寄せて下さいました。

氏の内閣官房長官ご就任に際し、千里山会世話人代表より祝電を送りましたが、後日、ご本人よりご丁寧なお礼の返事をいただきました。

さらに、編集部から直接ご本人に手紙を出させていただき、藤村氏の特集を組ませていただく許可と特集へのご協力をお願いしたところ、ふじむら事務所より

快諾を得ることができました。

会誌3号の氏の寄稿文の要約

生き方を方向づけた卒業時の

担任の交通事故死

氏は昭和32年に千里山に越してこられ千二小2年に編入—卒業。卒業時の担任は樋口先生であり、その樋口先生が交通事故で亡くなられたことが、氏が交通遺児救済運動の道に進むきっかけになった。

会誌7号の氏の寄稿文の要約

今開かれている国会のことなど

今やイラクへの自衛隊派遣や北朝鮮問題などの外交問題、年金改革、地方分権と補助金削減を目指す「三位一体」改革に加え、懸案の不良債権処理、道路公団民営化、景気経済・雇用対策を含む平成16年度予算の審議、さらに裁判員制度導入などの司法改革など課題山積の国会です。

私自身、国会に出て九十年。「永田町」的思考に陥ることなく「常識と普通の市民感覚」の理念を再度自らに厳しく課していきたい。

藤村修氏の経歴

生年月日

1949年11月3日生まれ

経歴

千二小―吹田一中―豊中高校―
広島大学工学部経営工学科
交通遺児育英会職員
あしなが育英会顧問・評議員
(社)日本ブラジル交流協会理事長

衆議院議員に

1993年 旧大阪府第3区(定
数5)より日本新党公認で初出馬
ながらトップ当選
以来、連続6回当選 その間
外務副大臣、厚生労働副大臣、
民主党幹事長代理を歴任
その他、前あしなが育英会副会長
前(財)海外日系人協会理事

氏は大学在学中に外資大手のコンピューター会社

に就職が決まっていたが、玉井氏(あしなが育英会会長)に口説かれ、即日、育英会入りを決める。

「もっとでつかく、世のため人のためになる仕事をしようよ」と。藤村氏と玉井氏は遺児救済の仕事をしなから、ブラジルに魅せられ、遺児や一般学生をブラジルで「働きながら学ぶ」1年研修制度を始める。藤村氏は満30歳のとき、事務局次長として「100年の計には人を植える」事業に専念。89年には社団法人日本ブラジル交流協会を設立。98年には理事長(会長は玉井氏)に。

両氏は共に、25年間に750人を研修させ、多くの俊秀が輩出した。

その頃の意気込みをご自身の言葉で語って頂こう。

遺児救済・奨学金の拡充等ボランティア活動に取り組み・・・遺児の進学問題が原点

大学時代、広島大学体育会系自動車部に所属し活動しておりました。当時(昭和40年代後半)は、各家庭が自家用車を所持するような時代ではなく、車も少

なかつたために交通事故や車にかかわる保険なども未整備な時代でした。

その当時、交通遺児の作文を読み、遺児となった子どもたちが、何の補償もなく生活窮乏のため、高校進学を諦めざるを得ない子がたくさんいることを知り、同時代を生きる若者のひとりとして「何とかしなければ」と考えたのが、活動の原点です。

以来40年弱。震災遺児、病氣遺児ら全国50万遺児の心の叫びが、行動の原点・原動力です。災害・病氣・自殺などで遺児となった学生に進学の道をひらくための奨学金募金活動に、学生時代より40年弱、今でも毎年欠かさず街頭に立っています。

ブラジル青少年交流

根底にあるのは、奨学金と同じ「人を育てる」こと。

故永野重雄氏(元日商会頭)からの遺志により、ブラジルでの若い世代へのよき日本文化の継承者、また、日本の若者がブラジルという全く違った環境の中でさまざまな体験をし、広い視野を養い、人間的にも豊かに生きるための学びを実践するため、日本とブラジ

ルの青少年交流を行う日本のブラジル青少年交流協会を1976年に設立しました。私は、一人の常駐事務局員として、活動の充実にむけ取り組み、89年に社団法人日本ブラジル交流協会となりました。既に若者750人以上が留学研修し、公務員、マスコミ、さまざまな業種の第一線で活躍しています。ブラジルの日系子弟のサポートを日本国内で行う者、ブラジル駐在の者も多く、両国の架け橋になっています。2008年はブラジル移民100周年・日伯交流年にあたり、日伯国会議員連盟事務局長として活動。訪伯も10年夏の渡伯で33回を数えました。

藤村さんの横顔

藤村さんの人となりを同級生の皆様に「披露願おうと33回生数人の方に手紙でお願いしました。その結果、同級生の佐久間さんや稲垣さんよりコメントや写真を送っていただきました。また、藤村さんの寄稿文にも載っている担任の樋口先生についてのコメントもいただきました。次頁に紹介します。

千二小で同級だった佐久間さんより

卒業アルバム巻末の「児童住所録」を見ていたら、ガリ版摺りの「旧六年松組連絡（網）方法」の紙が挟んでありました。男子の世話役に「藤村修」と印刷されていました。当時から信認が篤かったのだと思います。

佐久間様からは遠足時の集合写真を送って頂き、その中に幼いころの藤村氏が樋口先生と一緒に映っております。後ろの頁に掲載します。

吹田一中で同窓だった稲垣さんより

片山町（千里第一小学校）からの越境入学のため、「千里山会」のことは知りませんが、噂はかねがね楽しく伺っております。

藤村官房長官、がんばっておられると思います。同窓生として、とくにチカラになれず申し訳なく思いますが、まだ肩書の軽かった頃に一緒に一緒にさせていただいた時の記憶として

1. 非常に穏やかな人柄である

樋口嘉邦先生のこと

樋口先生は藤村さんが千二小を卒業された時の担任で、惜しくも交通事故で亡くなりました。そのことが、氏が交通遺児救済の運動に繋がっていく大きな動機づけとなったと千里山会第3号会誌に語られています。

次の一文はある方の記憶から

昭和33年4月 吹田第三小学校より千里第二小学校に赴任されました。大変はじめで教育熱心な先生で、同時に非常に子煩悩でした。お嬢さんの写真を見つても肌身離さず持ち歩き、一度見せていただいたところ、実に可愛かったのを覚えています。その後、千二校から千里ニュータウンの新設小学校へ転勤されました。

昭和50年ごろの冬休みに、九州まで自動車で旅行をされ、帰途、山口県内で交通事故にあい、亡くなるという衝撃的な最後でした。

葬儀は樋口先生の自宅がある高槻市の霊仙寺で営まれ、そこは高槻市中心部から北へ相当山奥く、僻地ともいえるべき地帯で、先生は早くからバイク、自動

2. ヘビースモーカーである
3. 酒豪である

4. 教育問題に一家言お持ちである

5. ブラジルと親交が深い

6. 現首相の信頼がとても篤い

7. 野心のない清廉な政治家である

8. 意外に女性に優しい

（彼の意外な隠し技ですね。政治向きの難しい話をわかりやすく、ソフトな語り口で説明してくれ、うちの家内は藤村長官の大ファンです。）

気になるのは「*ヘビースモーカーと*酒豪であること」。激務のストレスで喫煙・飲酒が超過しないよう祈るばかりです。

お役御免になられて付添SPの数が減ったら、また、以前のように一緒に飲みたいな、ねぎらいたいな、と思っております。

編集部

佐久間さんは環境カウンセラーとして認定・登録されています。市民、NGOや事業者が行う環境保全に対する助言などを目的に設けられている登録制度です。

車で通勤されていたのもむべなるかなと思えました。

この一文のお陰で、千二小で藤村さんと同級生の佐久間 秀一さんが次の文を下さいました。

樋口先生の思い出は、教育熱心な先生だったということです。算数の宿題はドリルみたいなのがよく出されていたのが思い出されます。

学校から帰って遊ぶ時間がなくなる・・・みたいな記憶がよみがえりました。あの頃は本当に宿題がいやでした。

それから6時間目の授業時間が終わっても、延長授業で、他のクラスの人達が掃除当番を終えてもまだ帰れないような時もありました。

また授業で宿題をやったことなかった人たちが教室の後ろにズラリと並ばされたこともありました。私も並んだ記憶があります。

給食では好き嫌いのある女の子がスキムミルクを飲めなくて、泣きながら飲まされていたこともよくありました。

ある日、午後の2時間続きの図工の写生の授業で郊外に出かけたときに、クラスの男の子2人が写生をし



上段の写真

前より2列目左端が
藤村少年
最後列左端が樋口先生
明石城へ遠足 (5年生当時?)



左側の写真

最前列右端が
藤村少年 その隣が
佐久間少年 二人で旗を持つ
最後列中央 樋口先生
奈良へ遠足 (5年生当時?)

ないで遊んでしまい何も描いていないのが見つかった、クラス全員の前で先生に頬を叩かれたこともありました。それから授業で先生が板書きしているときに児童同士で私語をしていると、チョークが飛んでくることもありました。

私は目立つ児童ではありませんでしたが、通知表の通信欄にはいつも丁寧な書き込みがしてありました。一人ひとりに丁寧に通信欄を書くには結構大変なことだと思えます。

卒業式の日の最後のホームルームでは思いもかけず、先生が涙声になって私たちにはなむけの言葉をかけてくれました。女の子たちはつられてみな泣いていましたし、男の子たちもシユンとなっていました。

また先生は新車のマツダクーペで学校に通勤していて、車が講堂の裏に止めてあったのを覚えています。このような断片しか覚えていませんが、今思うと私たちのために一生懸命に教えて下さったのだと思います。

私たちが今あるのも小中学校の義務教育の中で覚えたことが基礎になっていると思うと感謝に堪えません。



↑
伊勢神宮への修学旅行 お弁当時間
最前列 中央 帽子を被っていないのが藤村少年